

バス停と老人

そのバス停は田舎道にぼつんとあった。

時刻表の看板とベンチがひとつ。

屋根はついていない。

ベンチの背もたれには産婦人科の広告が、消えかけてはいるものの、辛うじて読むことが出来る。もともと産婦人科の病院は、とうの昔に廃業している。

海に浮かぶ無人島のように、バス停はその田舎道にひっそりと浮かんでいた。

何も知らないものからすれば、そこに本当にバスが来るのか、ひどく怪しく思えた。

しかし、ベンチに座った老人は、そこにバスが必ず来ることを知っていた。

知っているではなく、知っていた。

老人は死んでいた。

悪ふざけみたいな大きさの雲が、初夏の空の象徴になっている。

バス停にバスが止まる。

空気圧の音を鳴らして、入り口のドアを開ける。

運転手は初老の男だ。

一番後ろの席に、制服を着た女学生が座っている。

初老の男は無言のまましばらく老人を見つめてから、

また空気圧の音を鳴らして入り口のドアを閉めた。

バスが動き出し、田舎道を進み、豆粒のように小さくなっていく。

老人は死んでいる。向日葵は咲いている。

灰色の空に灰色の雲が浮かび、灰色の世界をつくっている。

バス停にバスが止まる。

空気圧の音を鳴らして、入り口のドアを開ける。

運転手は若い男だ。

一番後ろの席に、ギターケースを抱えたイギリス人が座っている。

若い男は、無言のまましばらく老人を見つめてから、

また空気圧の音を鳴らして入り口のドアを閉めた。

バスが動き出し、田舎道を進み、豆粒のように小さくなっていく。

老人は死んでいる。一粒の雨が地面を黒に染める。

雨が降っている。何かに抑止され続け、ようやく降ることが許されたと言わんばかりに。バス停にバスが止まる。

空気圧の音を鳴らして、入り口のドアを開ける。

運転手は初老の女だ。

一番後ろの席で、スタイルの良い美形のスポーツインストラクターの青年が白い歯を見せている。

初老の女は、無言のまましばらく老人を見つめてから、

また空気圧の音を鳴らして入り口のドアを閉めた。

バスが動き出し、田舎道を進み、豆粒のように小さくなっていく。

老人は死んでいる。老人は濡れている。

雨は降り続けている。

降り止むことを、何かに抑止されているかのように。

バス停にバスが止まる。

空気圧の音を鳴らして、入り口のドアを開ける。

運転手は若い女だ。

一番後ろの席に、三人の男がいる。

ジオルジオ・アルマーニを着た男、コム・デ・ギャルソンを着た男、ドルチェ&ガッバーナを着

た男。

若い女は、無言のまましばらく老人を見つめてから、

また空気圧の音を鳴らして入り口のドアを閉めた。

バスが動き出し、田舎道を進み、豆粒のように小さくなっていく。

老人は死んでいる。老人は濡れている。

雨は降り続けている。雨は降り続けている。

バス停にバスが止まる。

空気圧の音を鳴らして、入り口のドアを開ける。

運転手は十四歳の少年だ。

乗客席には大勢の若い女がいて、いずれも服を着ておらず、いずれも顔がない。

少年は、無言のまましばらく老人を見つめてから、

また空気圧の音を鳴らして入り口のドアを閉めた。

バスが動き出し、田舎道を進み、豆粒のように小さくなっていく。

老人は死んでいる。老人は濡れている。

雨は止んだ。悪ふざけみたいな大きさの雲が象徴になった空が、それを象徴している。

バス停にバスが止まる。

空気圧の音を鳴らして、入り口のドアを開ける。

運転手は老婆だ。

一番後ろの席に、迷彩服を着た日本兵が座っている。

老婆は、無言のまましばらく老人を見つめてから、また空気圧の音を鳴らして入り口のドアを閉めた。

バスが動き出し、田舎道を進み、豆粒のように小さくなっていく。

老人は死んでいる。老人は乾いていた。